

大阪史編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）
〒550-0014 大阪市西区北堀江 4-3-2

第42号

大阪市史料調査会（編集）
大阪府立中央図書館内 TEL06-6539-3333

●一枚の辞令

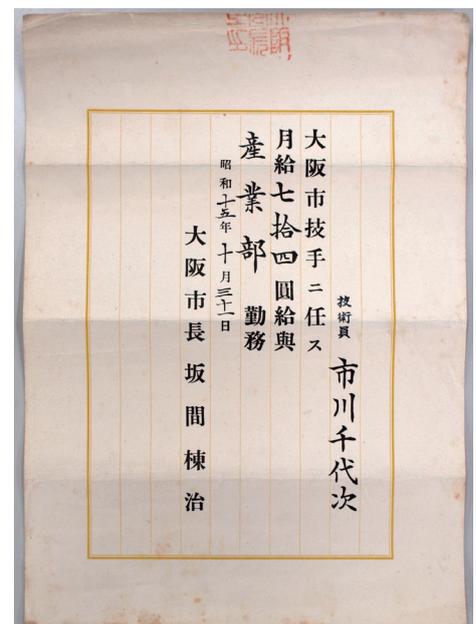
このたび、大正から昭和12年（1937）までの行政についてとりあげた、『新修大阪市史 史料編』第15巻「近代Ⅱ行政2」を刊行しました。これまで様々に紹介されてきた市の施策について、市民も含めた「現場の声」を多く紹介できたかと考えています。ぜひ、ご覧ください。

おりしも朝の連続ドラマ「ごちそうさん」では、主人公の夫が大阪市役所で建築に携わることになり、関東大震災（大正12年・1923）や地下鉄開業（昭和8年）など史料編と関わるようなお問い合わせが製作関係者の方から続きました。ある日いただいたのは、「昭和18年頃の市役所の辞令がないか」というものでした。辞令が大写しになるシーンを予定しており、美術スタッフの方が細部を確認したいとのこと。市公文書館でも誰に発行したかという台帳はあるが、辞令そのものは見当たらないとのことでした。編纂所であれこれ探していたところ、昭和15年10月に大阪市技手に任じられた市川千代次ちよじさんの辞令が見つかりました（写真）。「大阪市長之印」という角印が捺されたものです。これは市川さんのご遺族から寄贈されたもので（市川アイ氏寄贈文書）、編纂所ではしばしばこうした遺品の寄贈を受けることがあります。

日露戦争の前年（明治36年・1903）に生まれた市川さんは、南河内郡の尋常小学校を卒業して、大阪市立実業学校の夜間商業科を修了したのち、明正専修簿記学校、大阪貿易学校などで簿記や英語を学ばれたようです。また、大正15年には市教育会が初めて開催した成人講座の修了証もあります。成人講座は、何らかの都合で高等教育を受けられなかった人々が働きながら専門の知識を得られるよう企画されたもので、市川さんは市立高等商業学校教授まつざきひさしの松崎寿（1886-1935）から「現時ノ経済問題解説」など4科目を受講しています。貿易学校時代には級長、日本度量衡協会大阪支部が募集した事業案コンペに応募して佳作となり、昭和5年には小学校教員免許（商業科）を取得、昭和12年には商店経営指導員養成講習会を修了しました。苦学しながら商業に関する知識をひろめ、30代後半で市役所に採用されたこととなります。

また、学歴・職歴以外にも地域活動に関わるものとして、東淀川区防護団神津分団長からの感謝状が注目されます。これは昭和9年7月に行われた近畿防空演習の際、「不眠不休、実戦同様の御奮闘」ぶりで取り組んだことを評価されたもので、市ではこの訓練にあわせて防護団ぼうごだんを結成して防空体制を整備し、国防意識の高揚を目指したのでした。

こうした辞令や証書は、その人が生きた証として大切に手許に残しておかれたのだなということを改めて感じると



ともに、今回の史料編の時代がこうした形でも確実に刻み込まれているのだなということを再認識させられました。史料が寄贈されたのは30年以上前のことです。思いがけない記録の利用に市川さんもびっくりされたことかも知れません。(松岡弘之)

●百歳を迎えた戎橋筋商店街

昨年(2013年)でミナミの戎橋筋商店街は100年を迎えました。大正2年(1913)、近代的な商店街組織である「戎橋筋聯合会」が発足してから数えて、ちょうど100年目に当たります。「はっすじ」(橋筋)と呼ばれる戎橋筋ですが、戎橋が道頓堀に架かったのは、道頓堀が開削された400年前のことです。戎橋はその名が示す通り、そもそも今宮戎神社の参道の基点でした。

道頓堀に面し戎橋筋の西側が九郎右衛門町、東側が吉左衛門町、以下北から順に本塚町(千日前通りの一つ北側の路地まで)、本相生町(現在の千日前通り高速道路辺りまで)と町場が続き、その南に溝の側(難波センター街)を限りとして、難波新地が広がっていました。明和2年(1765)、難波新地が開発されて以降、夕涼みの名所として知られました。様々な新地繁栄策が講じられ、茶屋株などが許可される一方、地固めとして軽業・見世物などの興行が催されました。幕末期には溝の側を越えて南側は新戎町となり、見世物小屋が建ち並んでいました。また溝の側附近には「松の尾」「登加久」という料亭も建てられました。

近代に入ると阪堺鉄道(現在の阪堺電気軌道とは異なり、南海電鉄)難波駅が建設され、より一層賑やかな場所となっていきます。

戎橋の南詰より、阪堺鉄道難波停車場に至る間は、道頓堀に劣らざる繁昌地にして人の往来甚だ雑沓を極む、此筋に南吉楼、浜吉楼、丸万料理店、六兵衛善哉等ありて殊に世に知らる、(宇田川文海・長谷川金次郎編『大阪繁昌誌』、明治31年)

明治45年、「南の大火」が発生。都市計画・防災の観点から千日前通りが建設され、戎橋筋は南と北に分断されることとなりました。現在、高速道路が走っている場所に市電がひかれ、交差点上に「戎橋筋」の停留場が設けられました。

大正末～昭和初期の「大大阪」時代、戎橋筋から心齋橋筋にかけて、人々は大阪モダニズム文化を謳歌しました。

昼は人の流れの激しさに驚かされ、夜は狭い街路を飾る街路灯と、ショーウィンドーのきらめきに眼を眩するばかり。そこを店毎にのぞく婦人連、田舎出の老爺老婆、中でも学生帽が目立



「住吉潮干図」(戎橋～今宮村抜萃、龍門文庫)

つて多い。夕は会社帰りのサラリーマン、手を取合ふかれ氏かの女が肩をすり合つて流れちがふ。そしてこゝを歩く人々は、流行の衣服をまとひ、新型の帽子をいたゞき、モダンな街にモダンな雰囲気をまき散らし、楽しげに左右のきらびやかな飾窓を眺める。

(東出清光編『大阪案内』、昭和11年1月)

古来よりミナミの繁栄と共にあった戎橋筋商店街。近年、変貌著しいミナミの真ん中であって、戎橋筋の名の通り人々に親しみと笑顔を、今に橋渡しているのかも知れません。(古川武志)

◆大阪市立図書館のWebサイトが新しくなりました

2014年1月に大阪市立図書館のコンピュータシステムが更新され、Webサイトがリニューアルされました。これまでの古文書等のイメージ情報データベースは「デジタルアーカイブ」としてリニューアルし、機能を拡充して豊富な検索機能を提供するとともに、蔵書検索結果から、大阪に関する古文書や地図、古い写真や絵葉書などの画像をみることができるようになりました。

Webサイトのリニューアルにより、大阪市史編纂所のアドレスも変更になりました。新しいアドレスは http://www.oml.city.osaka.lg.jp/?page_id=871 です。図書館のトップページ左側に入りがちがあります。地域の歴史を発信できるよう、さらに中身を充実していきたいと思っています。みなさまのお越しをお待ちしております。



◆新刊のご案内

『新修大阪市史 史料編』第15巻「近代II行政2」

この史料集は、明治時代を扱った第14巻「近代I行政1」に続き、大正時代から日中戦争が全面化する昭和12年までの市民と市政のあゆみをたどるものです。

この時期、大阪市は第一次世界大戦を経て経済的にも大きく成長する一方、無秩序な開発や米騒動の発生など都市問題は深刻化していました。その後、大正14年の第二次市域拡張が実現したことで人口は211万人に達し、日本最大の都市となりました。この「大大阪」のもとで展開した、都市計画や社会事業、特別市制の要求など、まちづくりをめぐるさまざまな取り組みについて、行政内部やまちに暮らす人々、それぞれの側の記録230点を収録しています。

本体価格 5,500円 送料 450円

『大阪市史史料』第79輯「大坂町奉行着任時関係史料」

本書には大坂町奉行の着任に関わる史料をおさめています。大坂町奉行が着任に際して作成した文書、江戸から大坂に至る道中での動きと大坂に着いてからの諸対応、また大坂町奉行を出迎える役目を担った与力・同心の動きがわかります。さらにこれまで実態がよくわかっていなかった大坂町奉行の家臣の動向がわかる史料も収録しました。

本体価格 1,800円 送料 160円

刊行物のお求め方法

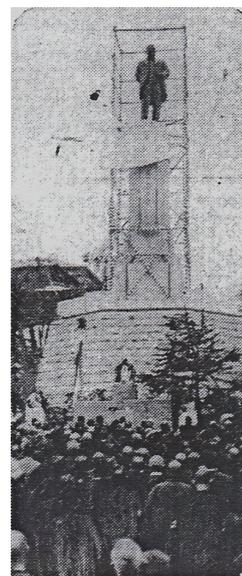
大阪市史編纂所の刊行物は大阪市史料調査会で窓口・通信販売を行っています。また、下記の書店でお求めいただけます。詳しくは大阪市史料調査会(市立中央図書館3階市史編纂所内・電話06-6539-3333)までお問い合わせください。

取り扱い書店：旭屋書店(天王寺MIO店)、ジュンク堂書店(大阪本店・千日前店・難波店)、
ミュージアムショップ文楽(大阪歴史博物館内)、紀伊國屋書店(梅田本店)

絵はがきでみる昔の大阪（20）

天王寺公園の池上四郎銅像（昭和10年～17年）

天王寺公園については、第39号でも紹介しましたが、今回は天王寺公園のなかにあった第6代大阪市長池上四郎の銅像が写っている絵はがきについて紹介します。画面の右上に写っているのが池上四郎市長の銅像で、非常に高い位置にあることがわかります。この銅像が建立されたのは、昭和10年（1935）4月4日のことです。当時の新聞には、「故池上氏銅像除幕式」（大阪朝日新聞）、「池上元市長の銅像 天王寺公園で除幕式」（大阪毎日新聞）、「蘇った池上さん 日本一の巨大な銅像となる きのふ盛んな序幕」（大阪時事新報）という見出しで、写真とともに紹介されています。大阪時事新報の記事には、「この銅像は北村西望氏の原形によって、大阪南区高津今村久兵衛工場^{きたむらせいぼう}で長日月にわたって製作されたもので、台石を入れてその高さ実に七十三尺の日本一の銅像^{かこうがん}でその総経費は三万円である」と紹介されています。台石は八角花崗岩でその高さは34尺、銅像



だけの高さは18尺とあります。台座の上に台石があり、その上に銅像が建っていることとなります。台座から銅像の頭までが73尺（21.9m）、銅像だけの高さ18尺（5.4m）、台石34尺（10.2m）、台座21尺（6.3m）ということになります。なお、総経費3万円というのは現在の額にして約9000万円ぐらいに相当します。当時日本一の高さを誇る銅像であったのでしょう。大阪市長で銅像が建てられたのは戦前では池上四郎だけです。池上市長は会津出身で、大阪府警察部長から市長になりましたが、^{せきはじめ}關一助役を東京高等商業学校から迎え、協力して大阪の近代化に努めた名市長です。没後6年、七回忌の命日にあわせて建立されていますが、この銅像は市民の尊崇と敬愛の表れとみることができます。

この銅像は残念なことに、昭和17年に金属供出されてしまいます。しかし、昭和34年（1959）に、高さも大きさも市民目線に近い形になって再建され、現在も市民を見守っています。なお、第7代市長關一の銅像は昭和31年（1956）に建立されています。大阪の市長で銅像になっているのは二人だけです。（堀田暁生）

【41号の訂正】 1頁記事のうち「丹南市」とあるのは「南丹市」、3頁の「箕面有馬電気鉄道」とあるのは「箕面有馬電気軌道」の誤りでした。それぞれお詫びして訂正いたします。

編纂所よりは3月と9月の年2回発行し、大阪市立各図書館のほか、各区役所、各区民センター、市役所市民プラザ、大阪市市民サービスカウンター、総合生涯学習センター及び各市民学習センター、大阪歴史博物館、大阪城天守閣、住まいのミュージアムなどに置いています（数に限りがあります）。大阪市立中央図書館（3階大阪コーナー）及び各区の図書館では最新号を常備していますので、カウンターでおたずねください。（平成26年3月発行）